

手と目と声と

灰谷健次郎

坪谷令子絵

理論社

手と目と声と

灰谷健次郎

坪谷令子絵

理論社

著者紹介

神戸に生まれる。詩誌「輪」同人。児童詩誌「きりん」の編集を手伝う。17年間の小学校教師生活ののち、アジア・沖縄を歩く。1974年「兎の眼」を発表し、静かな感動を呼ぶ。1979年山本有三記念第一回「路傍の石」文学賞受賞。主な作品に「兎の眼」「太陽の子」「せんせいけらいになれ」「島へゆく」「島で暮す」(理論社)「いま、島で」(文化出版局)「ひとりぼっちの動物園」(あかね書房)「わたしの出会った子どもたち」(新潮社) 林竹二氏との対談「教えることと学ぶこと」(小学館)等。



© Kenjiro Haitani, Reiko Tsuboya 1980
Printed in Japan

手と目と声と

一九八五年 九月 第五刷
定価／九八〇円

著者／灰谷健次郎

画家／坪谷令子

制作／小宮山量平

発行／山村光司

発行所／株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五・一六

電話(03)二〇三・五七九一

郵便番号 一六二二

振替 東京九一九五七三六

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

印刷・誠和印刷

灰谷健次郎作品集 * 手と目と声と

もくじ

水の話

5

手

35

目

69

声

99

友

139

装画・挿絵

坪谷令子

装幀

平野甲賀

水の話



九月いっぱい、水泳部は解散させられることになっていた。

そのころ、おれたちはほとんど学校の指示に従わなくなっていた。練習の時間も方法もおれたちが勝手に決め、顧問のセンコのいうことはまるっきり無視していた。

おれたちのことを、あれは中学生でもなんでもない、街のグレン隊だといった教師を、イタチという渾名あだなの部員が殴って以来、学校とは決裂状態だった。

おれたちを目的かたきにする教師がおおかただった。センコどもは、おれたちがアメリカのスイミング・クラブの連中のように上品でないのが、気に入らないらしかった。

イタチは学校にくるより、オヤジの後をついて縁日えんにちの夜店まわりに忙しかったし、おれは母子家庭で、母親は夜の街で働いていた。

つまり、おれたちは落ちついて勉強をする前に、いろいろ考え悩むことがあって、そうおじょうひんに振舞ってられない連中が多かったのだ。

おれたちは説教をたれる教師に辟易へきえきしていた。

以前、センコたちと話し合いをしたとき、父親と母親を交互に二度も替えさせられ、今は、まったく関係のない人間といっしょに暮らしているトンコという渾名の部員がいったことがある。

「勉強のできんもんは勉強をできるようにしてくれたセンコをええセンコというやろけど、かなしいことがありすぎて勉強なんか手につけへんもんは、そのかなしいことをいっしょに考えてくれるセンコがええセンコというんじゃ。この学校にそんなセンコおるんか」

トンコの問いにこたえることのできた教師はひとりもいなかった。

水泳部の解散を通告されたとき、おれたちの腹は決まっていた。そっちがその気なら、こっちもやりたいようにやろうやないか、全員そう誓い合ったのだった。

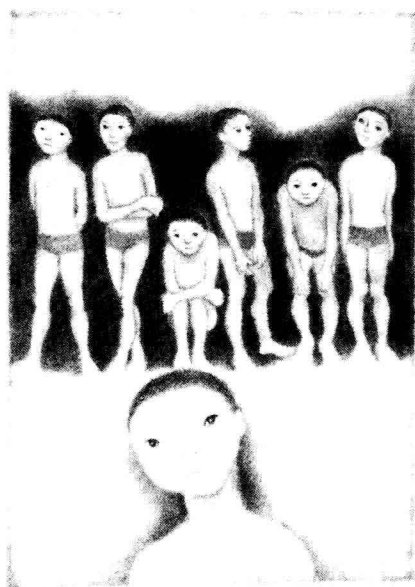
あいつ——李ひとり除いて。

その男は三時半にやってきた。

李のオヤジだった。

おれたちは、おれたちを裏切った李を、仲間からはずした。すると、李のオヤジから、よく話し合ってみないかと、申し出を受けたのだった。どういうわけか、いっしょに泳がせてほしいと添えてあった。

よく話し合ってみないか——インチキなセンコとおなじことをいうやないか、おもしろいや



ないか、きてもらおやないか。

その男は、約束の時間にやってきた。

男の姿を見ると、おれは素早く、他の仲間に目配せした。

「ひさしぶりの猫踊りかア」

と、二、三の部員が目を細めてうれしそうにいった。

男は、紺の地に黄と赤の横線の入った野暮ったい水泳パンツをはいていた。

(じきにくたばる代物とちがうか)

みんなの目がそういていた。

妙に白っぽい目をして、かたまっている部員たちの前を、男は白い歯を見せて笑って通った。

「ひと泳ぎさせてもろていいかい」

男の言い方は馴れ馴れしかった。おれは不機嫌になって顔をしかめた。

「風呂にはいるんとちゃうんやで。おじさん」

まわりの部員たちが、どっと笑った。

しかし、その笑い声はすぐかすれて消えた。

男はスタート台のすぐ横にかがんで、両手で煽^{あお}るようにして、広い胸に水をかけた。そのしぐさは、ちゃんと堂にはまっていた。すぐ目の前に、水があるという意識など、少しもないような素振り^{そぶり}だった。そして、ひょいと立つと、無造作^{むぞうさ}にタイルを蹴^けった。

からだが落ちるように傾き、足がサイドから離れる瞬間、男のからだは見事に跳躍していた。

その何気ない柔らかい身のこなしのうちに、はっとするきびしさが、部員たちの目に跳ねた。

宙に浮いた男のからだは、やや、くの字の形に曲げられ、浅く水にはいろいろとするときの動作^{かた}に適^あっていた。すっかり力をぬいた筋肉は、なめらかな流れるような線をつくり、それは、つぎにくるたくましい力の奔流^{ほんりゅう}に備えた無心の休息のようにも見えた。

いつも、うわずった、固いぎくしゃくした動きを矯正^{きようせい}しようとしている部員たちにとって、それは、ちょっとしたおどろきだった。

おれたちは思わず顔を見合わせた。

男の泳ぎは、水の上をすべるようだった。確かなキャッチングを身につけている。

(どこかで、水泳をやっている)

と、おれは思った。

軽く流して、男はプールサイドにあがってきた。

かたく浅黒く引きしまった皮膚から、水滴がしたたり落ちた。ときどき男の唇からこぼれる白い歯が、印象的に部員たちの目を刺した。

「おじさん、すごいやないか。おれたち、すっかりイカレてしもた」

イタチは、半分本気で半分なめていった。

男は、ほんとイタチの頭をたたいた。にやつと笑って、イタチはいった。

「賭けへんか、おじさん」

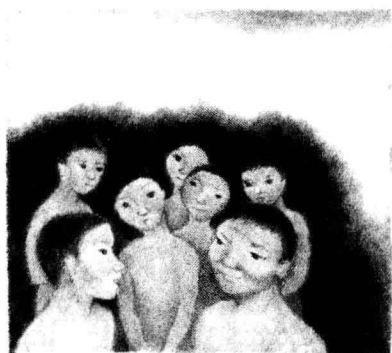
イタチはいつも、さくらだった。

「なにを賭けるんだい」

「みんなに、ビフテキぐらいおごってくれば最高やけど、べつにおれらはそんなことが目的とちがうんや」

と、イタチはいった。

「どのみち、二十人もいるおれたちに、うどんをいっぱいおごるのも大変やろ。え、おじさん何屋や」



イタチは、にやにやと笑っていた。

どうせ、さくらのイタチにすれば、猫踊りを見さえすればよかったのだ。

猫踊りというのは、おれたちだけに通用する言葉だった。

たまたま面白半分に、猫をプールに投げこんだおり、溺死寸前の猫のようすを見て、だれがつけたというでもなく生まれたことばだった。つまり、餌食にされたこの男を、すっかり水に浮くまで、いためつけようというわけなのである。

しかし、おれは浮かぬ顔をしていた。

「おじさんの泳ぎなら、フリーやな。フリーで八百、どうや。やるか、おじさん」

イタチの目が少し光った。

「やるか」

と、男は軽くいった。

イタチは唇を斜めにゆがめて、

「いい度胸やな」

といったが、その声はいくらかかすれていた。

そのとき、おれはふいに、自分は負けるだろうと思った。その意識は、どうしてか、無抵